

テーマ展「井伊家の茶の湯 —伝来茶道具をめぐる10の物語—」作品リスト

	作品名称	員数	作者	時代	指定	所蔵者
物語1 宮王肩衝茶入 —2代直孝の戦功の褒賞—						
1	おおもひいぶつ みやおうかつつきやいれ 大名物 宮王肩衝茶入	1合		中国・宋時代		当館(井伊家伝来資料)
2	いひねんぶ 井伊年譜	1冊(5冊の内)		江戸時代		当館(井伊家伝来典籍)
3	おんはいりょうものならぬに おんたいだいおんどうぐらいちょう 御拝領物并御代々御道具類帳	1冊		江戸時代	重要文化財	当館(彦根藩井伊家文書)
4	がんかめいぶつき 玩賞名物記	1冊		江戸時代 万治3年(1660)成立	重要文化財	当館(彦根藩井伊家文書)
5	おおきかなつ じんず わかえ かつせんず 大坂夏の陣図(若江合戦図)	1幅	山縣岐鳳	江戸時代		当館(井伊家伝来資料)
6	ちやどくおほえがき 茶道具覚書	1枚	井伊直亮	江戸時代後期	重要文化財	当館(彦根藩井伊家文書)
物語2 我宿時絵硯箱 —將軍秀忠の遺品—						
7	わがやどまますずりばこ 我宿時絵硯箱	1合		室町時代	重要文化財	当館(井伊家伝来資料)
8	しゅあんとうざんず しきず うち 謝安東山図(四季図の内)	1幅(4幅の内)		中国・明時代		当館(井伊家伝来資料)
物語3 青磁香炉 —將軍綱吉から4代直興へ、信任の証—						
9	せいじこうろ 青磁香炉	1口		中国・明時代		当館(井伊家伝来資料)
10	おうじゅうます 桜樹馬図	1幅	徳川綱吉	江戸時代前期		当館(井伊家伝来資料)
物語4 呂宋壺 —宇治から江戸へ、運ばれた新茶—						
11	ろもんつぼ 呂宋壺	1口		中国・明時代		当館(井伊家伝来資料)
12	ちやいりにっき 茶入日記	1枚		江戸時代前～後期		当館(井伊家伝来資料)
13	こぼりえんしゅうしよじょう いひおたかあて 小堀遠州書状 井伊直孝宛	1幅	小堀遠州	江戸時代前期		当館(井伊家伝来資料)
14	おかものぶなりしよじょう 岡本宣就書状	1通		江戸時代前期 寛永2年～11年頃 (1625～1634)		当館
物語5 菱紋台子と天目台 —御成の茶道具—						
15	なしあおいもんちらしまきえたいす 梨地菱紋散時絵台子	1基		江戸時代中～後期		当館(井伊家伝来資料)
参考	だいすかいぐ 台子皆具	1式	名越弥五郎	江戸時代後期		当館(井伊家伝来資料)
参考	こしきぐちがま がんびかんつきがる 甕口羽釜・雁皮鑊付風炉	1式		江戸時代後期		当館(井伊家伝来資料)
16	むらなしあおいもんまきえてんもくだい 叢梨地菱紋時絵天目台	1基		江戸時代中～後期		当館(井伊家伝来資料)
17	くろうるしぬりあおいもんまきえてんもくだい 黒漆塗菱紋時絵天目台	1基		江戸時代中～後期		当館(井伊家伝来資料)
18	くわきあおいもんまきえてんもくだい 桑木地菱紋時絵天目台	1基		江戸時代中～後期		当館(井伊家伝来資料)
参考	けんさんのあててんもてんやわん 建盞木目天目茶碗	1口		中国・宋時代		当館(井伊家伝来資料)
19	かんせいどわかぎみきまおりのせつおんかざりつけのとめ 寛政度若君様御成之節御飾付之留	1冊		江戸時代後期	重要文化財	当館(彦根藩井伊家文書)
物語6 鶴首茶入・弦付茶入・文琳茶入 —12代直亮の収集品—						
20	ながじるしものちょう 長印物帳	1冊	井伊直亮	江戸時代後期	重要文化財	当館(彦根藩井伊家文書)
21	からものもりもとぶんりんちやいれ 唐物森本文琳茶入	1口		中国・宋時代		当館(井伊家伝来資料)
22	からものつぎくちやいれ 唐物鶴首茶入	1口		中国・宋時代		当館(井伊家伝来資料)
23	こせとつるつきやいれ 古瀬戸弦付茶入	1口		桃山時代		当館(井伊家伝来資料)
物語7 楽焼橋紋形向付 —13代直弼から直亮への贈りもの—						
24	らくやきたちばなもんがたむこうづけ 楽焼橋紋形向付	5枚	井伊直弼	江戸時代後期		当館(井伊家伝来資料)
25	むこうづけにつきおほえがき 向付二付覚書	1枚	井伊直亮	江戸時代 弘化元年(1844)	重要文化財	当館(彦根藩井伊家文書)
物語8 古銅弦月釣花生 —13代直弼所用の茶道具—						
26	こどうげんげつづりはなにいけ 古銅弦月釣花生	1口		江戸時代中～後期		当館(井伊家伝来資料)
物語9 菱橋紋茶弁当 —13代直弼の息女弥千代の婚礼道具—						
27	あおいちはなもんちやべんどう 菱橋紋茶弁当	1式		江戸時代後期		当館(井伊家伝来資料)
参考	まつだいらちよこがぞう 松平千代子画像	1枚		大正時代 大正15年(1926)		当館(岡島家伝来資料)
物語10 湖東焼芦雁図水指 —関東大震災の罹災品—						
28	ことうやきあしかりずみずさし 湖東焼芦雁図水指	1合	鳴鳳(絵付)	江戸時代後期		当館(井伊家伝来資料)
29	ことうやきかわせみずけんすい 湖東焼翡翠図建水	1口	鳴鳳(絵付)	江戸時代後期		当館(井伊家伝来資料)
30	ことうやき うめ しょうきんず しゃくたて 湖東焼梅に小園図杓立	1口	鳴鳳(絵付)	江戸時代後期		当館(井伊家伝来資料)

写真解説

1 大名物 宮王肩衝茶入 1合 (作品リストNO. 1)

中国・宋時代

高9.6cm 口径4.6cm

当館蔵(井伊家伝来資料)

井伊家^{なまたか}2代直孝(1590~1659)が、大坂の陣での活躍の褒賞として、徳川家康から拝領した^{おおめいぶつ}大名物の茶入。茶入は、濃茶で用いる^{まっちゃや}抹茶を入れる容器で、その用途の重要性と端正な造形美から、茶道具の中でも特に尊重されてきました。茶入の名品は、一国一城にも代わる存在とみなされ、軍功の褒賞として用いられることも多くありました。

大名物は、古くから名品として世に広く知られてきた茶道具の中でも、とりわけ優品と考えられてきたものにのみ冠せられる呼称で、その多くは、室町時代の茶の湯文化の中心を担った足利將軍家の旧蔵品です。本作の「宮王」の名は、千利休^{せんりのきゅう}の謠^{うたい}の師であった宮王三郎鑑氏^{みやおうさぶろうあきうじ}(?~1553)が所持したことに由来します。

江戸時代享保年間(1716~36)頃に、彦根藩士の功刀君章^{くぬきみあき}がまとめた史書、「井伊年譜」(作品リストNO. 2)には、直孝がこの茶入を非常に大切にし、取り出す時には袴を着用し、手を清めて臨んだというエピソードが記されています。

本作の姿は大ぶりで、肩の張った堂々とした形に強い存在感があります。^{うわぐすり}釉の色も変化に富み、魅力ある風情を湛えています。その威風に満ちた姿は、直孝の戦功の輝かしさを表しているようにも感じられます。



2 我宿蒔絵 硯箱 1合 (作品リストNO. 7)

室町時代

縦22.3cm 横23.2cm

重要文化財

当館蔵(井伊家伝来資料)

井伊家2代直孝が、2代將軍秀忠^{ひでただ}の遺品として3代將軍家光^{いえみつ}から拝領したと伝わる硯箱。硯箱は、硯^{すずり}、筆^{すいてき}、水滴などを収める箱で、文房具の一種です。本品は、四隅に装飾的な^{くぼ}窪みを作る入り隅^{すみ}という形状で、蓋の甲には、籬^{まがき}、菊^{つがい}、蝶や番^{おしどり}の鴛鴦を描いています。名は、水辺の岩に隠された「我」と「乃」の2つの文字に由来し、「我宿の」を含む和歌にちなんだ意匠と考えられます。

江戸時代に入り太平の世を迎えた後も、直孝は、3代家光と4代家綱^{いえつな}から全幅の信頼を受け、筆頭家臣の立場で將軍を支えました。拝領品目録などの記録類をひもとくと、とりわけ直孝の代に刀や茶道具などの貴重な品を將軍家から拝領していたことが分かります。これらの拝領品から、直孝の將軍への忠孝の篤^{ねぎら}さと、それに対する將軍の労いの情を読み取ることができるでしょう。



3 ^{る そんつぼ} 呂宋壺 1口 (作品リストNO. 11)

中国・明時代

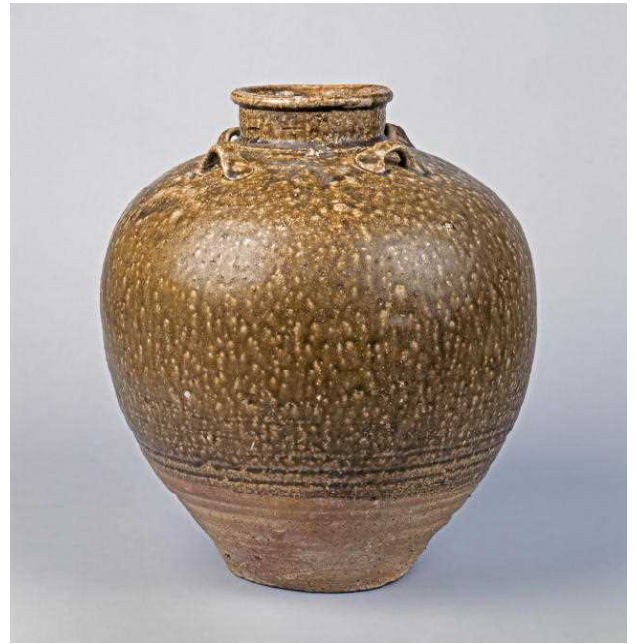
高31.3cm 口径8.4cm

当館蔵(井伊家伝来資料)

茶葉の保管に用いられた茶壺^{ちやつぼ}。本作は、元来酒や香料を入れていた雑器が、茶壺に転用されたものと考えられます。灰褐色^{はいかつしよく}の陶胎に緑褐色の釉薬を流し掛けた、軟質施釉陶器と分類されるやきものです。現在、この種の壺は、明時代に中国南部で制作されたと考えられていますが、古くは、貿易の経由地であったルソン島の産と考えられたため、「呂宋壺」と呼ばれてきました。

本作の収納箱の蓋裏には、宇治の茶師が、詰めた茶葉の茶銘や内容量、日付などを記した紙(作品リストNO. 12)が貼り付けられており、本作が、宇治の新茶を井伊家に納める際に用られた茶壺であることを物語っています。

また、江戸時代初期の大名茶人として名高い小堀遠州^{こぼりえんしゅう}(1579~1647)が、井伊家2代直孝に宛てた書状(作品リストNO. 13)も共に伝えられています。この茶壺を遠州が直孝に斡旋^{あつせん}するという内容の書状であり、伝来の由緒を物語ります。



4 ^{こどうげんげつりはないげ} 古銅弦月釣花生 1口 (作品リストNO. 26)

江戸時代 中～後期

高41.7cm

当館蔵(井伊家伝来資料)

天井から釣り下げて用いる花生^{はないげ}です。大きな弓張月形^{ゆみはり}で、幅の広い部分には、雲を鑄出^{いだ}しています。

この花生は、彦根藩の下屋敷であった榎御殿^{けやき くてん}の庭園^{げんきゅうえん}、玄宮園において、井伊家13代直弼^{なおすけ}が、安政元年(1854)9月18日に開いた茶会で用いたものです。

「彦根水屋帳^{ひこねみずや ちょう}」という直弼自筆の茶会の記録には、この日の茶会に招かれた客の名や用いた道具などが記されています。当日は庭の菊が満開であり、菊を愛でる趣向か、この花生には花を生けず、水だけを入れて床に釣ったとも記されています。

